

チエアスキー!

2018年平昌パラリンピック

つかめ!再び金メダル

チエアスキー選手鈴木猛史さんに聞く

8月1日(火)、いわき海浜自然の家にチエアスキーの鈴木猛史選手(29)を招き、取材を行った。福島県猪苗代町出身の鈴木選手は、小学2年生の時に交通事故に遭い、両大腿切断。9歳の時にチエアスキーと出会った。パラリンピックには過去3回出場し、3つのメダルを獲得している。今回は、鈴木選手のチエアスキーに対する思いや、素顔に迫った。鈴木選手は映像や実際に競技で使う道具、メダルなどを使って説明し、どのような質問にも気さくに答えてくれた。終始笑顔が絶えない取材となった。

みんなと同じように滑る喜び

鈴木選手がチエアスキーを始めたきっかけは、小学校のスキー教室。鈴木選手は、猪苗代町の小学校でスキー教室がある。脚を切断したことでみんなとスキーが出来なくなると思っていたが、町では小学校でスキー教室がある。脚を切断したことでみんなとスキーが出来なくなると思っていたが、



▲笑顔で今までの経験やチエアスキーについて語る鈴木選手

り多くはない。W杯では30人ほどが出場する。チエアスキーは1枚のスキー板で滑るため難しい。滑るコツを聞いて、

3・11にメダル届けたかった

過去3回パラリンピックに出場している鈴木選手。初出場はトリノパラリンピックだった。その後練習を重ね、3度目の出場となったソチパラリンピックの回転競技で念願の金メダル。さらには滑降競技でも銅メダルを手にした。

「会場に入る前は余裕がありました。いざ入ってみると心臓がつかえそう。緊張が止まらなかつた」と、初めてのパラリンピックについて語る鈴木選手。4年に1度というだけあって、ほかの大会では、

と一緒に行けるのが嬉しかったという。チエアスキーをやっていてよかったことは、障がい忘れられることだそう。競技としてチエアスキーをやっている人はあまり多くはない。W杯では30人ほどが出場する。チエアスキーは1枚のスキー板で滑るため難しい。滑るコツを聞いて、



▲ソチの金メダル 点字が入っている

印象に残った言葉

「甘いものが好きなんです。でも、糖質制限があるんですよ。ゲームもカメラも好きです」
「競技にはお金がかかります。遠征費や用具代で年間1200万円ぐらいです。東京オリンピック・パラリンピックが決まって国からの支援が増えました」
「スタートする時は怖いです。でも、ゴールの先にあるものが見たくてまたスタートします」
「アメリカの選手は恐怖心が薄いと感じます。戦場での体験があるせいでしょうか」
「脚がなくなって不自由だと思ったことはありません。大学時代のコーチは僕を障がい者とは見なかった。僕はみんなと変わらない人間なんです」

私たちが編集しました。



後列左から長沼和花(福島高1年)・山本加奈子(泉中2年)・横山怜奈(湯本一小5年)
前列左から小宮真希人(泉中1年)・酒井春人(草野小6年)・鈴木太樹(好間中1年)・大谷終斗(三和小6年カメラ担当)

重いメダル

ニユースを届けたという気持ちの方が強かったという。鈴木選手は、来年に迫った平昌パラリンピックではソチパラリンピック以上の成績を残したいと意気込んでいる。(長沼・横山)

新婚ーハワイ帰ります

鈴木選手は新婚旅行のハワイから帰って来たばかり。奥さんはキャスターで美人。2人が出会ったきっかけは、金メダルを獲得した鈴木選手に、奥さんが自身のラジオ番組に出演を頼んだことだ。そんな奥さんとの休日の過ごし方は「カフェに行ったり買い物をするんです。ホームセンターでチエアスキーのネジを探